

援農有償ボランティア事業の運営実態と今後の展望

著者	今野 聖士
雑誌名	地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報
号	4
ページ	33-40
発行年	2020-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	40022266694
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001852/



研究報告

援農有償ボランティア事業の運営実態と今後の展望

今野聖士

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：農業雇用労働力 労働力不足 援農ボランティア

1. はじめに

昨今の農業における労働力不足は引き続き深刻な状況である。とりわけ季節的な労働力需給のピークを有する青果物等において、影響が大きくなってきており、名寄市においても農家から労働力不足を訴える声が上がっている。一言に農業における雇用労働力不足と言っても、その実態は大きく2つに分けられる。1つは常用雇用労働力、いわゆる「常雇」と呼ばれる労働力であり、通年（農林水産省の「農業センサス」の定義では7ヶ月以上、北海道においてはそれよりも若干短いケースもある。必ずしも1年間切れ目のない雇用ではない）で雇用される。法人経営においては有給休暇や社会保険等を完備し、農産物加工等の冬期間・閑散期の作業を確保した上で雇用されることが多い。家族経営農家においても6次産業化による作業の確保や外国人技能実習生等の雇用により、補完されている。

もうひとつは臨時雇用労働力、いわゆる臨時雇である。こちらは主に数日から数ヶ月における短期的な労働力需要を支えている。臨時雇は短期間であるため、それだけで自身の生計を立てることは出来ず、再生産されない。このため家計補助的な雇用に留まってしまうため、労働力需要が逼迫する中では、より好条件の場へ雇用が移動してしまう（端的には農外へ）。よって、農業では現在常雇化の動きが進展しているが、常雇と臨時雇の関係は臨時雇を常雇化すれば良いといった単純なものではない。農作業は、どんなに平準化しよう計画しても、作物・作業環境・天候等によって避けられないピークが出現することが多い。このような場合に臨時雇は不可欠であり、常雇化で“全て”は解決しない。

以下昨年の繰り返しになるが、「地方部、特に都市部から十分な労働力を調達することのできない遠隔地にある農村地域では、雇用労働力不足が農業生産場面に直接的な影響を与え、非機械化品目の作付減少といった“実害”が生じはじめている。名寄市においてもそれは例外では無く、収穫時の人手不足を理由に特産の青果物の作付面積が減少する一方で機械化可能な耕種が増加している。特にアスパラガスは収穫時が2ヶ月程度と短い事に加え、収穫のピークが一気に立ち上がることから雇用労働力に依存する部分が多く、昨今の労働力不足を反映して、作付面積の減少（更新の中止・延期や収穫量が少ない品目への転換等）が生じている。」

このような事態を受け、2018年度から名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの研究事業として、援農ボランティア事業を実施している。2019年度も引き続きケア研、名寄市農政課、JA道北なよろ営農部営農課からご支援・ご協力を頂き、学生からも有償ボランティアの協力を頂いて事業を実施した。本稿では本年度の状況を整理した上で、今後の展望について確認していきたい。

2. 援農ボランティア事業実施の経緯

2017年の春頃から、市役所・農協等農業を支援する立場の機関へ何らかの支援を期待する声が農業者から寄せられるようになった。また、筆者のところにも講義等で関係性をもった農家から労働力不足の状況や、

学生アルバイトの募集に関する相談が寄せられるようになった。そこで、農家のアルバイト募集の情報を学生に何らかの形で紹介できないかと考えた。何人かの学生にインタビューを試みたところ、ほとんどの学生は飲食店・小売店等でアルバイトをしているが、農業に関してはあまり知識や関係性が無く、農業がアルバイトの選択肢に入っていないことが示唆された。農業アルバイトは名寄ならではの経験を得ることができ、金銭以上の体験を得ることができると考えられるため、関係機関と協議の上、試験的に講義で関係性のある農家とのマッチングを試みることにした。結果、春夏期に計15名程度が農家アルバイトに従事した。

極めて限定的とはいえ、20名近くの参加者があり、学生・農家双方から継続展開を求める声があったことから、関係機関と協議の上、事業実施を検討することとなり、2019年度に改めて組織作りと事業体制の整備を行った。

1) 2018年度の組織構成

事業名を「名寄市立大学生援農アルバイト事業」とし、関係機関にそれぞれ担当を設置した。大学は名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター(担当:センター企画委員兼本研究事業担当の教員)、市は経済部農務課(担当:課長)、JA道北なよろ(担当:営農部営農課長、アスパラ部会長、スイートコーン部会長)とした。大学は、コミュニティケア教育研究センターが通常のボランティア支援に準ずる形で各種支援(問い合わせや募集など)を実施するほか、本事業をコミュニティケア教育研究センター課題研究として採択し、事業実施に係る費用の一部、また研究を実施するに当たっての費用を支援する体制を取って頂いた。費用は主にリーダー役の学生に対する作業日誌入力およびアンケート回答に対する謝礼(リーダー手当相当)、研究に係る消耗品の購入である。

また、市および農協等が構成員となっているファームサポート協議会から、学生が使用する長靴・作業着(ツナギ)・雨合羽の貸与を受けることとなった。これは、農業がアルバイトの選択肢に入らない理由として、作業内容がイメージできないことに加え、準備するものにかかる費用が高いとの意見が学生から出ていたためである。このことにより、調整の煩雑さは増すものの、学生の参加するハードルが下げられたと思われる。

事業期間は2期制とし、1期を5月中旬～6月下旬、2期を夏休み期間中とした。主な想定作業は1期がアスパラ関連作業、2期がスイートコーンやかぼちゃ関連作業である。

2) 事業における雇用条件の統一

本事業を行うに当たって重要な検討事項となったのが雇用条件の統一である。一括して募集・マッチングを行うため、紹介先農家によって雇用条件が異なることは学生の不利益になる。また安全面の配慮(危険な作業の禁止・労災等傷害保険の加入・送迎中の事故に対応出来る自動車保険の確認、雇用時間等)も万全を期した。以下具体的な雇用条件を示す。

基本的に事業では調整(受付・マッチング・サポート)のみ行い、実際の契約・雇用時間の調整等は学生と農家間で直接行う。時給は受入農家説明会当日に大学のアルバイト募集掲示板に掲示されている金額をベースに検討した。居酒屋等が850～860円程度、農業者が900～1000円程度で出稿しているため、それらを一定程度上回る水準に設定された。作業時間は1期の場合、実働8時間(休憩は午前15分、午後15分、お昼1時間を基本とし、その間は無休相当。お昼を除いて8時間半拘束、実働8時間相当)とした。但し実質的には休憩時間は学生の体調や天候・作業量等を勘案しながら調整を行う事とした。残業は当事者間で協議し、双方同意が取れる場合は実施出来る事となった。農業は労働時間制限の適用除外となっているが、今回は8時間を超えた分は125%で支払うものとした(学生が他産業のアルバイトと比較して選択していると考えられるため)。2期の場合は①5:00～10:00と②7:00～12:00の2パターンを基本とした。時給水準はアスパラ事業を踏襲し、早朝の①パターンは+100円の設定とした。そのほかの条件は1期と同一である。基本的に雨天決行とするが、極度な天候不順や作業の進捗等により半日で作業終了となる事もある。このような天候等による作業中止の可能性について、予め学生へ周知を行った。

送迎については農家が行う事とした（集合時間・場所等は当事者間で連絡して決定する）。

支払方法は現金日払いを基本とし、相談に応ずるとした。

安全面では、安全に留意し、危険な作業はさせないこととし、労災に加入を義務づけた。万一事故があった場合（送迎時を含む）には基本的に当事者間で対応とした。

服装等は、学生の費用負担を避けるため、高額な装備については市とJAで支援する事とした（長靴、作業服、雨合羽貸与）。手袋については農家側で準備し、支給する事とした。

3. 2019年度援農ボランティア事業の経過

1) 事業の概況

表1に本事業の概要を示した。運営主体は昨年度と同様、本学、名寄市、JA道北なよろで構成した。実施作業も同様で1期は5月中旬～6月下旬、2期は夏休み期間中（8月中旬～9月下旬）とした。受入農家戸数は1期16戸（昨年+5戸）、2期11戸（同+3戸）となり、2018年度より若干増加した。参加学生数も1期49名（昨年+13名）・2期45名（同+14名）と2018年度に比べて若干増加している。ただし、2018年度は募集に対し2倍程度の応募者があったが、2019年度は1.2倍程度に留まった。広報手段・スケジュールによる変動は若干考えられるが、賃金水準も一定影響したと考えられる（2018年度、2019年度の有償額は同額。最低賃金が上昇したため、実質的には目減りしたように見える）。

2) 事業の実施スケジュール

表2に事業実施にかかるスケジュールを整理した。3月末に1期の募集を農家に対して行い、受入希望者に集まって頂き、ボランティアの趣旨とスケジュール、事業実施体制等について説明し、有償の水準を決めて頂いた。以後これらの情報を持って、講義終了時や昼休み、本学玄関におけるデジタルサイネージ等を利用して広報に努め、参加学生を募集した。その後、リーダーの選定や物品の貸し出し、顔合わせ会等を経て実施に至っている。2期も同様の流れであり、7月上旬に農家へ希望調査を行い、その後説明会において趣旨説明・有償水準の決定、募集を行い、事業実施に至っている。なお詳細な組織構成・事業実施体制等は2018年度と同様のため、拙稿（2018）を参照頂きたい。

2019年度に新たに行った取り組みとしては、貸し出し品に短靴（農業用地下足袋）を加えたことである。雨天時などほ場がぬかるんでいる場合は長靴が必須となるが、天気が良い場合は暑く重い。このため、短靴を新たに購入し貸し出すこととした。もう1点は事業期間終了時に打ち上げ交流会を実施した

表1 援農(有償)ボランティア事業の概要

名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（担当教員）	
運営主体	名寄市経済部農務課(担当課長)
	JA道北なよろ営農部(担当課長)
実施事業	アスパラおよびスイートコーンの収穫・調整を中心とした作業
実施時期	1期:5月18日頃～6月29日頃の土日中心 2期:8月10日頃～9月16日頃(夏期休暇期間中)
募集範囲	名寄市立大学 学生(学年問わず)
受入農家	1期:16戸 2期:11戸
参加学生数(計画値)	1期:49名・延べ291名作業従事 2期:45名・延べ530名作業従事

資料:事業運営資料を元に筆者作成
注:参加学生数は当初の計画値である。実際は作業進度や学生のスケジュール変更、体調等による調整があり、若干の変動(主にマイナス方向)が想定される。

表2 事業実施に係るスケジュール

日付	内容
2018年12月頃	市役所・農協と事業開始検討について協議
2019年3月29日	アスパラ生産組合全戸へ希望を照会
4月15日	学生向け説明会開催(1回目)
4月17日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
4月19日	学生向け説明会開催(2回目)
4月22日	学生向け説明会開催(3回目)
4月26日	学生向け説明会開催(4回目)、申し込み締切
5月8日	参加確定者向け説明会開催(昼休み)
5月10日	作業班リーダー向け資料配付・農家と学生の顔合わせ会
5月14日	リーダー向け作業日誌配信
5月18日	アスパラ収穫事業開始
5月23日	作業服・長靴・雨合羽貸与開始
期間中随時	参加学生(リーダー)より状況聴取、対応
6月29日	事業終了
7月4日	第1期打ち上げ交流会(学生約37名参加)
7月9日	第1期参加学生意見交換会
7月上旬	スイートコーン生産組合全戸へ希望を照会
7月16日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
7月23日	学生参加受付開始
7月29日	学生参加受付締切(第1次、以降空気があれば随時受けつけ)
8月8日	参加学生最終確定
8月10日	スイートコーン収穫事業開始
9月16日	事業終了・第2期打ち上げ交流会(学生約16名参加)
2020年2月27日	次年度事業体制方法について打合せ(農協)

資料:事業運営資料を元に筆者作成

ことである。農家さんと学生が同じジジギスカン鍋を囲み、互いに感謝を伝える会である。参加者からの評価はおおむね好評であった。筆者も参加したが、農家さんが学生を将来の顧客としてとらえ、名寄の農業・日本の農業の応援団になって欲しいとの思いから、非常に気を遣って様々な声かけ等を行ってくれていたことが見て取れた。学生からも作業参加に際して感謝や楽しかったといった感想が聞かれた。このような点が、単なるアルバイトとは異なるボランティアたる所以である。

4. 事業の実績

1) 第1期事業の実績

表3に参加学生の属性を示した。1年生が31名と大半を占めたが、11名2年生の参加があった。新規の学生もいたが、大半は昨年度の経験者である。性別はほとんどが女性であった。学科はやや看護学科が多くなっているが、4学科全てから参加頂いた。特に過年度経験者である2年生が参加してくれたことは非常に好ましい結果である。改めて作業をレクチャーする必要が無いことから即戦力として作業に当たれるほか、1年生と一緒に作業に従事することでOJTも期待できるからである。

表3 参加学生の属性

1年生	31
2年生	11
3年生	1
4年生	0
男性	2
女性	41
栄養	9
看護	14
社会福祉	12
社会保育	8

資料: 運営資料より筆者が作成

過年度経験者のうち、農家と学生双方で希望が一致した場合には優先的に同一農家へ配置した(一部他の農家を見てみたいとの意で希望しない学生もいた)。表4に単純集計した農家別作業従事回数を示した。全体で見ると5月はのべ134回参加、6月はのべ162回参加、通期ではのべ296回参加していた。平日は講義の関係からほぼ参加はなく、土日が中心となっている。農家ごとに参加人数に差があるため、単純平均の意味合いは薄いものの、平均してのべ20名弱の学生が農家の元に訪れたことは、労働力支援やボランティアとして

表4 農家別作業従事回数(単純集計)

	A農家	B農家	C農家	D農家	E農家	F農家	G農家	H農家	I農家	J農家	K農家	L農家	M農家	N農家	O農家	P農家	総計	農家一戸あたり単純平均
5月土日	8	10	11	9	4	6	7	8	14	7	8	8	13	6	6	2	127	7.9
5月平日	2	2	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0.4
5月計	10	12	11	9	4	8	7	9	14	7	8	8	13	6	6	2	134	8.4
6月土日	10	14	8	12	8	5	4	10	12	9	19	8	26	1	13	0	159	10.6
6月平日	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0.2
6月計	10	14	8	12	8	6	4	10	12	11	19	8	26	1	13	0	162	10.1
総計	20	26	19	21	12	14	11	19	26	18	27	16	39	7	19	2	296	18.5
うち平日	2	2	0	0	0	3	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	10	0.6

注:P農家は都合により途中で受入中止となったため、5月は16戸、6月は15戸として計算している

表5 個人別作業従事回数

班 個人	A				B			C			D			E			F			G			H		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
全日(8h)	3	4	4	4	4	8	6	7	6	5	7	8	6	6	6	4	3	6	4	3	4	7	6	5	
従事 時間帯 午前のみ	0	1	1	0	3	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
午後のみ	1	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
残業有り											1	2	1						1			1		1	
従事 回数 単純回数	4	7	5	4	8	11	7	7	6	6	7	8	6	6	6	5	3	6	4	3	4	7	6	6	
フルタイム換算	3.5	5.5	4.5	4.0	6.0	9.5	6.5	7.0	6.0	5.5	7.0	8.0	6.0	6.0	6.0	4.5	3.0	6.0	4.0	3.0	4.0	7.0	6.0	5.5	
班内 平均 単純回数	5.0				8.7			6.3			7.0			6.0			4.7			3.7			6.3		
フルタイム換算	4.4				7.3			6.2			7.0			6.0			4.5			3.7			6.2		
班 個人	I			J			K			L			M			N			O			P			
	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	
全日(8h)	10	6	9	7	5	6	6	7	8	7	7	9	8	4	5	9	1	2	4	11	6	0	4	4	
従事 時間帯 午前のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	
午後のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
残業有り	4	3	4							2	2	1	1	1	1				2	2					
従事 回数 単純回数	10	6	9	7	5	6	6	7	8	7	8	10	9	5	5	10	1	2	4	12	7	0	4	4	
フルタイム換算	10.0	6.0	9.0	7.0	5.0	6.0	6.0	7.0	8.0	7.0	7.5	9.5	8.5	4.5	5.0	9.5	1.0	2.0	4.0	11.5	6.5	0.0	4.0	4.0	
班内 平均 単純回数	8.3			6.0			7.0			7.5			7.8			2.3			9.5			2.7			
フルタイム換算	8.3			6.0			7.0			7.3			7.4			2.3			9.0			2.7			

農業現場を知るという意味で大きな意義があったと考えられる。同じく表5から個人別の作業従事回数を見ると個人ごと・班ごとに従事回数にやや差が見られる。また、半日の参加は余り多くなく、ほとんどが全日（フルタイム）参加であった。全体の状況を整理すると表6のようになる。学生1人あたりで見ると平均参加回数は6.4回（半日勤務もあるためフルタイム換算すると6.1回）、最も参加数が多い学生で12回（フル換算11.5回）、少ない学生で1回（フル換算1.0回）である。半日参加および残業はあまり見られなかった。

表6 参加学生間の作業従事回数の平均値

単純回数平均	6.4
フルタイム換算平均	6.1
最大単純回数	12.0
最小単純回数	1.0
最大フルタイム換算	11.5
最小フルタイム換算	1.0
合計参加回数(単純回数)	286.0
合計参加回数(フルタイム換算)	274.5
合計参加回数(全日参加)	263.0
合計参加回数(半日参加)	23.0
全日:半日比	11.4:1
残業有り回数	30.0

資料:運営資料より筆者作成
注:途中で受入中止となった農家を除いた値である

次に作業環境について整理した。表7、8に集合～解散時間の集計を示した。基本的なスケジュールは8時頃～17時頃の実働8時間であったが、開始時間は7時と8時に分かれていた。終了時間は過半が17時であった。また、注意すべきなのが集合から作業開始までの時間および作業終了から解散までの時間である。農家まで移動する必要があるため、概ね作業開始の30分程度前から集合・移動することが求められる。一部1時間を超えるケースもあり、その間、給与が出ない対応がなされていると考えられることから、農家と学生の自宅の距離や移動経路等の詳細分析は必要なものの、将来的な改善が望まれる。表9に従事作業種類と従事割合（MA；複数回答）を示した。MA比は回答数を有効回答数で除したものであり、全体の何割の回答者がその選択肢を選んだかがわかる

表7 参加学生の集合・作業開始・作業終了・解散時間の分布

集合時間	割合	作業開始時間	割合	作業終了時間	割合	解散時間	割合
～6:29	22.8%	～6:59	3.7%	～16:59	22.8%	～16:59	10.3%
6:30～6:59	12.5%	7:00～7:29	33.8%	17:00～17:29	61.0%	17:00～17:29	36.0%
7:00～7:29	13.2%	7:30～7:59	11.0%	17:30～17:59	8.8%	17:30～17:59	39.0%
7:30～7:59	29.4%	8:00～8:29	37.5%	18:00～18:29	5.9%	18:00～18:29	9.6%
8:00～8:29	16.2%	8:30～	14.0%	18:30～	1.5%	18:30～18:59	3.7%
8:30～	5.9%					19:00～19:29	0.7%
						19:30～	0.7%

資料:作業日誌より筆者作成
注:全日参加分のみ(半日参加データが少なくバイアスが大きいため除外した)

表8 参加学生の集合から作業開始、作業終了から解散までの概算時間の分布

時間	集合～作業開始	作業終了～解散
15分程度	12.7%	9.3%
20分程度	16.0%	33.3%
30分程度	48.7%	48.7%
45分程度	20.7%	7.3%
1時間以上	2.0%	1.3%
平均	32分	27分

資料:作業日誌より筆者作成
注:平均時間は0分の回答を除いている

(以下同様)。1期はアスパラの収穫を中心にしているため、アスパラ関連作業が6割以上を占めている。ただし、本年度は天候不順により事業開始当初大量の収穫作業が生じたものの、その後干ばつによる収穫量の減少もあり、アスパラ関連作業がごく早期に終了した例があった。このため、昨年度(8割)よりアスパラ関連作業の比率が減少していると考えられる。それ以外ではスイートコーンやかぼちゃの関連作業が多くなっている。表10に学生の作業環境や作業の感想を示した。従事して間もない5月の通期(土日の約8日間、ただし月末は作業量が急減している)と最終作業従事日となった6月22日(土)～23日(日)のデータを比較した。右上端の「作業が難しい」については5月の段階では回答が分散していたが、6月末には難しいと考える学生がゼロとなり、右下端の「作業に慣れてきた」という回答が増えていることから、数回の作業でも十分に習熟が可能である作業が割り当てられたと考えられる。「作業が楽しい」「やりがいがある」は当初の方が強い感想を持っていたが、作業の慣れとともにやや落ち着く傾向が見える。これらの感想はほぼ昨年度と同様の傾向であった。

表9 従事作業種類と従事割合(MA)

作業種別	割合
アスパラ関連作業	65.3%
スイートコーン管理作業	22.0%
カボチャ管理作業	18.0%
水稲連作業	8.7%
その他一般作業	15.3%

資料:作業日誌より筆者作成
注:総回答数150で各回答数を除している

2) 第1期事業に係る学生の感想

学生との意見交換会から学生の総合的な感想を確認すると、概ね良い評価が得られた。例えば、「優しく、失敗したら叱られるが、頭ごなしで無く、教えてくれた」「初めて農業アルバイトしたが、優しく教えてくれて、体力的にはきつかったが、参加出来て良かったと思った。行けなかったことも多かったが嫌な顔せずにしてくれてやりやすかった」といったものである。また、過年度経験者から「去年も行ったので、去年のこ

表10 作業従事学生の作業環境・作業の感想の経過比較(5月通期の回答および6月最終従事日)

	暑くて大変			寒くて大変			作業が難しい		
	5月	最終従事日	変化	5月	最終従事日	変化	5月	最終従事日	変化
全く思わない	1.5%	0.0%	-1.5	82.4%	25.0%	-57.4	11.8%	8.3%	-3.4
あまり思わない	5.9%	0.0%	-5.9	14.7%	25.0%	10.3	50.0%	50.0%	0.0
どちらでもない	2.9%	50.0%	47.1	2.9%	41.7%	38.7	22.1%	41.7%	19.6
そう思う	36.8%	33.3%	-3.4	0.0%	8.3%	8.3	13.2%	0.0%	-13.2
とてもそう思う	52.9%	16.7%	-36.3	0.0%	0.0%	0.0	2.9%	0.0%	-2.9
	作業量が多い			作業時間が長い			休憩時間をもっと欲しい		
	5月	最終従事日	変化	5月	最終従事日	変化	5月	最終従事日	変化
全く思わない	19.1%	25.0%	6	2.9%	0.0%	-2.9	33.8%	33.3%	-0.5
あまり思わない	26.5%	33.3%	7	4.4%	0.0%	-4.4	27.9%	25.0%	-2.9
どちらでもない	29.4%	8.3%	-21	19.1%	16.7%	-2.5	23.5%	41.7%	18.1
そう思う	22.1%	33.3%	11	52.9%	58.3%	5.4	13.2%	0.0%	-13.2
とてもそう思う	2.9%	0.0%	-3	20.6%	25.0%	4.4	1.5%	0.0%	-1.5
	作業が楽しい			やりがいがある			作業に慣れてきた		
	5月	最終従事日	変化	5月	最終従事日	変化	5月	最終従事日	変化
全く思わない	1.5%	0.0%	-1.5	2.9%	0.0%	-2.9	2.9%	0.0%	-2.9
あまり思わない	1.5%	0.0%	-1.5	7.4%	0.0%	-7.4	4.4%	0.0%	-4.4
どちらでもない	13.2%	0.0%	-13.2	41.2%	50.0%	8.8	19.1%	16.7%	-2.5
そう思う	55.9%	58.3%	2.5	48.5%	50.0%	1.5	52.9%	58.3%	5.4
とてもそう思う	27.9%	41.7%	13.7	62.5%	33.3%	-29.2	20.6%	25.0%	4.4

資料: 作業日誌より筆者作成

注: 6月最終従事日は、ほぼ全班が作業を終了した6月22、23日(土日)の結果である

とを覚えてくれていて嬉しかった。去年も良かったから、行きたいと思って行った」との感想も聞かれた。一方で課題としてあげられたのは「初日が長すぎた」(初日のみ急にアスパラが成長した時期に当たってしまったため、夜10時頃まで作業に当たったという。直ちに同様の事例が無いか確認し、夜遅くまでの作業を禁止した)、「居酒屋バイト(920円 17-22)よりも給料が低い」「給料の計算が間違っている」「支払方法が当初聞いていた形と違った」といった指摘があった。この点に関してはJAを通じて農家へ照会し、あらためて説明する対応を行った。また、一部天候の影響で早期に終了した農家があったが、今期は作業が続いている農家へ一部移動して作業に当たるケースもあったという(可能な範囲内で学生の作業従事期間を確保して頂く努力をして頂いた)。

3) 第2期事業の実績

続いて本項では第2期事業の実績を表から述べる。まず参加学生の属性を表11から確認すると、第1期事業と同様ほとんどが1年生・女性であり、学科は看護がやや多くなっている。次に表12に農家・旬別作業従事回数を示した。農家によって5時パターンと7時パターンに分かれ、両方を受け入れる農家はない。これは2パターンで受け入れた場合、送迎を2度実施しなくてはならないためである(大きなタイムロスとなる)。また、天候次第で農家が収穫時期を選択できないアスパラと異なり(厳密にはハウス栽培・露地栽培・立茎栽培などの技術を用いれば地域レベルで時期をずらすことは可能)、スイートコーンは移植時期をずらすことによって、一定程度の収穫時期の調整が可能である。このため、受入開始時期が若干異なったほか、終了時期も農家によって異なる。

表11 参加学生の属性

1年生	34
2年生	13
3年生	1
4年生	0
男性	3
女性	45
栄養	12
看護	14
社会福祉	14
社会保育	8

資料: 運営資料より筆者が作成

表12 農家・旬別作業従事回数(単純集計・事業開始時の計画値)

	A農家	B農家	C農家	D農家	E農家	F農家	G農家	H農家	I農家	J農家	K農家
5時~10時	×	×	×	○	○	○	○	×	○	×	×
7時~12時	○	○	○	×	×	×	×	○	×	○	○
8/10(土)~18(日)	36	9	14	10	9	17	0	0	20	0	0
8/19(月)~31(土)	62	13	26	20	13	24	33	20	25	7	5
9/1(日)~16(月・祝)	38	16	24	19	10	17	11	23	20	16	10
総計	136	38	64	49	32	58	44	43	65	23	15
従事日数	38	38	38	25	32	32	22	28	38	23	15
1日あたり従事希望人数	5	1	2	2	1	2	3	2	2	1	1
1日あたり平均従事人数	3.6	1.0	1.7	2.0	1.0	1.8	2.0	1.5	1.7	1.0	1.0

資料: 運営資料より筆者が作成

注: 数値は計画値である。実際は農家の都合、生育状況、天候、学生の都合等で上下があると思われるが把握していない

お盆明けから8月末あたりが1つのピークとなっていた。学生もお盆の前後どちらかに帰省する傾向があるため、お盆前とお盆明けがピークとなっていた。従事日数は15～38日間、同時参加人数は1～5名であった。参加のべ人数は少ないところで10数人日、多いところで130人日程度となっていた。次に表13から参加学生間の作業従事回数の平均を見ると、平均で12日程度、多くの学生が6

表13 参加学生間の作業従事回数の平均値(計画値)

単純回数平均	12.9
最大単純回数	35.0
最小単純回数	3.0
～5回	5
6～10回	11
11～15回	14
16～20回	5
21回～	6

資料: 運営資料より筆者作成

～15回程度参加していた。また、過年度経験者については、学生と農家の双方が合意した場合には優先的に配置した。加えて、一部の学生は本事業を経由しないで農家にアルバイトとして雇用されていたようである。本事業は営利を目的としていないため、特段直接の雇用関係の成立を妨げる立場にはない。ただし、JA

表14 農作業に参加した経験の有無

項目	割合
はじめでもしくは家庭菜園レベル	28.3%
数回経験あり	26.1%
農業アルバイトの経験あり	45.7%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

職員を通じて、雇用環境

表15 援農ボランティア参加の動機

項目	とても そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	あまり 思わない	全く 思わない
農家・地域をした	37.0%	63.0%	0.0%	0.0%	0.0%
農業に興味があった	41.3%	52.2%	4.3%	2.2%	0.0%
農家との交流	43.5%	52.2%	4.3%	0.0%	0.0%
純粋にアルバイトとして	58.7%	39.1%	0.0%	2.2%	0.0%
学生生活・体験の充実のため	50.0%	39.1%	8.7%	2.2%	0.0%
就活の際に役立ちそうだから	10.9%	50.0%	26.1%	10.9%	2.2%
自身の専門に役立ちそうだから	15.2%	43.5%	26.1%	15.2%	0.0%
主権が知っている教員・公的組織で安心だから	37.0%	41.3%	10.9%	8.7%	2.2%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

(保険・作業内容等の安全
全面)については遵守す
べき事、また物品の貸し
出しや教員・JAによる
サポート(トラブル対応
等)、終了時の交流会等

への参加は出来ない事を通知した。協議の結果、直接の雇用関係を持ち、人材のマネジメント(シフト管理等)は独自に行うものの、サポート(物品・トラブル)と交流会等の行事参加を理由として、本事業を経由した申し込みを行った農家が2戸あった。人材のマネジメントのみ直接行って頂き、諸条件(有償額、雇用環境等)は同一とし、受けつけた。

表14に農作業に参加した経験の有無を示した。半数近い45.7%の学生が農業アルバイト経験を持っていた。表15に援農ボランティア事業参加の動機を示した。いずれの設問も「とても思う」「そう思う」の回答が多かった。地域貢献や農業への興味、学生生活の充実(体験)のためや純粋なアルバイトとしての回答が高く出ている。若干数字は「どちらとも言えない」「あまり思わない」の方向に傾斜するものの、自身の専門に役立ちそう、や公的組織による安心感を挙げる学生も多かったと言える。

5. おわりに

このように、「名寄市立大学学生援農ボランティア」研究事業は、昨今の労働力不足下における労働力補完を主目的としながらも、単なるアルバイトだけでは無い付加価値として、ボランティアの精神を学生・農家両方が持つことで、単純な作業・労働力ではなく、多様な経験(農家との会話等も含む)をベースとした名寄ならではの体験・経験を提供し、食農を考える契機とすることが出来たと考えられる。

その体制は本年度も、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター・名寄市農務課・JA道北なよろ営農部営農課が協力し、組織体制を作ることが出来た。この場をお借りして、関係各位に深く御礼申し上げます。

昨年度課題となった天候不順による早期作業終了(作業従事期間の確保)についても、無理のない範囲でまだ作業が続いている方のほ場へ移動し作業を継続するといった対応を行って下さった例があった。またごく一部の農家に、労働力としての側面を期待しすぎる方や支払方法等について十分な理解が不足しているケースがあり、学生に不安を抱かせた。直ちにJAと協力して対処したため大事には至らなかったが、引き続き理解を求める取り組みや、日々学生からのシグナルに注目する必要がある。また、第2期のマッチングにつ

いては本年度も調整の難しさという課題が残った。諸条件(参加希望数、学生のスケジュール、農家間の公平等)を満たしながらスケジュール調整を行うことは事業担当者にとって大きな負担となっている。ただし、この負担を公的組織が無償で行うからこそ、本事業が学生・農家にとって良いものとなっていることも事実である(相互がボランティアの意識を持つ事ができ、過度なコストがかからないため労働力としてコストパフォーマンスを評価することも無くなる)。また、貸し出し・送迎を必要とする学生の特性等に合わせた状況を考えると現状のような仕組みが「短期的」には最適解であると考えられる。特に第1期のようにチームを組んで参加し、農作業等について全く理解のない学生が参加する場合には、本事業はフィッティングが良いと思われる。ただし、第2期に関しては調整コストが大きいため、何らかの工夫が必要である。本年より1デスマッチングアプリによる農作業アルバイトがJA道北なよろ管内で始まったため、そちらの動向にも気を配りながら将来的な統合もしくはすみ分けを検討していく。

以上のように課題はあったものの、農家・学生にとって一定の意義を見いだすことは出来たと考える。2020年1月22日には、昨年に引き続きJAから学生への感謝の印としてもち米(もち)の提供を受け、無料でお雑煮を振る舞うイベントを開催できた。地域農業・JAと大学・学生の関係性強化の一端となれば幸せである。

なお、2020年度も農家・JAからの要望により、事業実施予定である。その際には、ここ2年間計画値しか把握できていない第2期の作業従事について、データを集める工夫を行いたい。次年度も関係各団体と密接に連携を取りながら、課題に取り組み、より良い地域農業と学生・大学の関係性構築に向けて、研究事業(3年目)を進めていきたい。

参考文献

今野聖士(2019)「援農ボランティア事業の実施に係る経緯と展開」名寄市立大学コミュニティアケア教育研究センター 年報 第3号(通巻37号), pp. 31-40

【付記】

本稿は、平成30年度名寄市立大学コミュニティアケア教育研究センター課題研究による「農業雇用労働力狭隘下における学生援農アルバイトによる労働力支援事業に関する研究」における成果の一部である。

「2. 援農ボランティア事業実施の経緯」は昨年度の筆者原稿から再校正の上収録している。初出 今野(2019)。